

**デリバリーパスタのサイドメニューは
配達員のお姉さんのエッチなカラダ**

「こんばんはぁ！！ご注文のデリバリーパスタお届けにまいりました！」

玄関のチャイムが鳴り、ドア越しに元気な女性の声が聞こえた。俺は“待ってました！！”とばかりに小走りで玄関に向かいドアを開けると、そこにはとっても綺麗な若いお姉さん。

俺が電話で注文した商品を届けにやってきてくれたのだ。

毛先がクルンッと内側にカールした派手な色の髪の毛の上に、ピンク色のヘルメットが乗っかっている。

ふと下に目をやると、少し肌寒い夜だというのにホットパンツに近いほど短い丈の短パン。肉付きの良いムチムチの太ももが露出している。

パスタが乗った大きなお皿の上にはシルバーのドームカバー。お姉さんは両手でそれを抱えて元気な声で言った。

「ありがとうございます！こちらお商品になりますねえ！」

少し恐る恐る、と言った感じで俺は尋ねる。

「あの、サイドメニューなんですけど・・・」

実を言うと、自分でこのＬサイズパスタを注文しておきながら、俺がもっと楽しみにしていたのは

“パスタと一緒に頼んだサイドメニュー”なのだ。

「はい！もちろん承っておりますので」

そう言って彼女は一歩足を前に踏み出し、玄関の中へと入った。

「えっと・・・そ、そうですね、あの・・・ここでよろしいでしょうか？」

「いやいやとんでもないですよ！中に入ってください。寒いでしょう？」

「あ、はいっ！気を使っていただいてありがとうございます！」

俺の心遣いが嬉しかったのか、配達員のお姉さんはニッコリと微笑み、靴を脱いで俺の自宅の中に入った。

俺が頼んだサイドメニューは・・・。

“デリバリーお姉さんの母乳とオマンコから出てくるマンコジュース”

サイドメニューと言いつつ、本心としてはこれがまぎれもなく俺にとってのメインメニューなのだ。

俺は現在23歳の平凡なサラリーマン。

だけど、募るのは並々ならぬ性欲。そしてそんな俺にとって、デリバリーお姉さんのムッチムチなカラダはまるで渴死寸前に見つけた潤いのオアシス。

お姉さんの年齢は俺より一つだけ年上だけど、とてもそんな風に思えないくらい色気があるんだ。

室内はもう迎え入れる準備万端。

この瞬間を心待ちにしていた俺は、温かいソファにホットコーヒーまで用意しておいた。

「わざわざこんな、なんだかすみません。私なんかのために・・・」

「いやいや何言ってるんですかぁ。僕はお姉さんを待ってたんですから！」

「そんな、私なんてただの“サイドメニュー”ですもの・・・」

「そんなご謙遜しないでください。コーヒーでも飲んでゆっくりされますか？」

「とってもありがたいんですけど・・・私、早くサイドメニューお渡ししたくてウズウズしちゃってるんですっ！」

「ほんとですか！？すごく嬉しいなぁ。じゃあ早速ですけど・・・」

「はい！喜んで！！」

もうこの時を待ちわびてうずうずしていた俺。早速サイドメニューからいただくことにした。

お姉さんは服を脱ぎ始めた・・・。

ボロンッとかぼれ落ちて、ブラブラと左右にそしてほんの少し上下にも揺れた後、ようやく静止したのはお姉さんのふっくら丸みを帯びた大きなおっぱいだ。

見た目だけでプニユプニユしていて柔らかそう。だけど決してだらしくはなく、弾力もありそうで上を向いている。一言で言えばとっても健康的。

「今夜はいっぱい母乳が出ちゃいそうなんですっ！だからちょっとでも早くお客様に届けしたかったんですよお！」

露わになった乳房を、お姉さんは両外側から両手でギュッと内側に寄せてみせた。

「ほんとですかあ！嬉しいなあ！」

たまらなくなってきた俺はお姉さんのおっぱいに飛びついていった。

「ムプチュウ・・・チュパチュパチュププッ！ジュブブブブブ・・・」

やっとありつけたサイドメニュー。

だけど本当はこれが俺のメインメニュー。

部屋の隅っこのテーブルに、ドームカバーすら開けないで置きっぱなしになっているパスタは正直どうでもいい。

これが！

これこそが！

このおっぱいが欲しかったんだ！！

ピンク色の突起物を舌で転がし、転がし飽きたら今度はチュパチュパと吸いつく。

まるで〇児が哺乳瓶を頬張るように。

なるほどお姉さんの言った通り、大きくなおっぱいからはたくさんの濃くて美味しいミルクが出てきた。

「ゴクゴクゴク・・・ンクンクンク・・・」

もういい大人のこの俺が、目をつむっておっぱいにおしゃぶりしている。そして夢中になってゴクゴクと飲むお姉さんの母乳。

ママのおっぱいから離れた〇児よりもさらに退行して、俺はもはや生まれたばかりの〇児状態なのだ。

「一生懸命にあたしのおっぱい吸ってくれてるぅ・・・可愛いお客さん・・・あはぁん、気持ちいい！もっと吸って舐めていいんですよおっ、んあぁぁ！」

「ンチュププチュパ・・・ンチュププププププ」

「んはぁん・・・とっても気持ち良いわ！ミルクどンドン噴射しちゃうぅ！！」

―――体験版はここまでです―――